

考古学のための文書解説 近世初期の城の蔵

矢田 俊文 (新潟大学人文学部)

表1 慶長11年(1606)甲州八田家道具等収蔵施設一覧

表2 元和2年(1616)駿府城道具等収蔵施設一覧

表3 天和元年(1681)越後高田城道具等収蔵施設一覧

【解説】八田家は戦国期より蔵を有することが確認できる地域の有力者(1)で、甲州の平地に複郭の城をもつ(萩原三雄 1994・1995)。駿府は徳川家康の城である。越後高田城は松平光長の城である。表1～3とも、史料は道具帳で、それを道具が収納されている施設ごとに分類して表にした。表1、2は、それに記されるモノについてはすでに考察が行われている(関口欣也 1982、秋山 敬 1987、徳川義宣 1992、萩原三雄 1994・1995)。しかし、モノが収納される施設については検討が加えられていない。このような道具帳については、さらにモノそのものの研究が行われる必要があるが、同時にモノが収められる施設の研究も行われる必要がある。

今回紹介した表1～3からはさまざまなことがわかるが、例えば次のようなことが指摘できる。駿府城の「御さうし(草子)蔵」(表2-4)には歌書・物語本・謡本、「二ノ丸紙綿紅入御蔵」(表2-16)には、綿・紅・紙、高田城の本丸雑蔵五番改炭蔵(表3-10)が収納されている。よって収められているモノと蔵の名称は対応するようにも思える。しかし、八田家の「ふんこ(文庫)」(表1-4)には、古具足・甲・面類などの武具も収納されている。文庫といえば、書籍等を収納しているように思いがちであるが、表1をみるかぎりそうではないことがわかる。

駿府城の天守には「穴蔵」(表2-6)があり、そこには反物が収められている。天守の「穴蔵」は、文字どおり蔵としてつかわれていたことがわかる。高田城の「本丸矢倉」(表3-5)には、高麗薄茶碗・朱四角盆などが収められていた。「矢倉」も文字どおり蔵として使用されていたことがわかる。おなじく高田城の三ノ丸南之多門(櫓) (表3-21)には、渋紙・色紙が収められていた。多門櫓も蔵であったことがわかる。

城郭遺構である大内氏館(山口県山口市)・感状山城(兵庫県相生市)・置塩城(兵庫県夢前町)・御着城(兵庫県姫路市)・枝吉城(兵庫県神戸市)・端谷城(兵庫県神戸市)伊丹城(兵庫県伊丹市)・高屋城(大阪府羽曳野市)・若江城(大阪府東大阪市)では、塙列建物が検出されている(置塩城跡調査委員会 2002、神戸市教育委員会 2005)。この塙列建物は、城の蔵の可能性が高い。

城の蔵以外でも、草戸千軒、京都、堺、摂津平野で塙列建物が検出されている(大阪市文化財協会 1999、鈴木康之 2001・2005、續伸一郎 2001、山本雅和 2002、広島県立歴史博物館 2004、国立歴史民俗博物館 2005)。城以外で塙列建物が検出されるのは集散地である。この草戸千軒、京都、堺、

摂津平野の埴列建物も蔵の可能性が高い。文献史学においても集散地における蔵の研究をすすめる必要がある。

〔註〕

- (1) 八田氏の城がある地点とは離れているが、(天正9年)4月1日末木家重護状・天正15年3月2日願念等扱宗裁定手形(ともに「八田家文書」『山梨県史 資料編4 中世1 県内文書』所収)によると、八田氏は等々力に「蔵」を持っていたことがわかる。平山優氏は、等々力は甲州街道に面した交通の要所にあたっているところであるとする(平山 優 1990)。

〔参考文献〕

- 秋山 敬 1987 「中世の社会と文化」『石和町誌』第1巻 自然編・歴史編  
大阪市文化財協会 1999 『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1996年度—』  
置塩城跡調査委員会 2002 『置塩城跡総合調査報告書』夢前町教育委員会  
神戸市教育委員会 2005 『端谷城跡—平成17年度現地説明会資料—』  
国立歴史民俗博物館 2005 『東アジア中世海道』国立歴史民俗博物館  
関口欣也 1982 『山梨県の民家』山梨県教育委員会  
鈴木康之 2001 「中世の町における建物復原をめぐって—広島県草戸千軒町遺跡の出土資料から—」『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究』(1998年度～2000年度科学研究費補助金〈基盤研究A [1]〉研究成果報告書・研究代表者玉井哲雄)  
鈴木康之 2005 「草戸千軒をめぐる流通と交流」柴垣勇夫『中世瀬戸内の流通と交流』塙書房  
續伸一郎 2001 「中世の町における建物復原をめぐって—広島県草戸千軒町遺跡の出土資料から—」『考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究』(1998年度～2000年度科学研究費補助金〈基盤研究A [1]〉研究成果報告書・研究代表者玉井哲雄)  
徳川義宣 1992 「徳川家康の遺産」『家康の遺産—駿府御分物』徳川美術館・徳川博物館  
萩原三雄 1994 「家財目録等にみる中世城館の様相—甲州八田家家財目録から—」植松又次先生頌寿記念論文集刊行会編『甲斐中世史と仏教美術』名著出版  
萩原三雄 1995 「財産目録からみた陶磁器の所有一甲州八田家家財目録を中心に—」『貿易陶磁研究』15号  
原 直史 2005 「史料紹介 大名家道具帳」矢田俊文・竹内靖長・水沢幸一編『中世の城館と集散地』高志書院  
平山 優 1990 「戦国末期に甲斐国における在地秩序について」『武田氏研究』6号  
広島県立歴史博物館ほか 2004 『津々浦々をめぐる—中世瀬戸内の流通と交流』  
山本雅和 2002 「中世京都のクラについて」『研究紀要』8号、京都市埋蔵文化財研究所

〔付記〕端谷城跡については、中井淳史氏にご教示いただいた。

表1 慶長11年(1606)甲州八田家道具等収蔵施設一覧

	収蔵施設名	収蔵品名
1	さかへや〔酒部屋〕の道具	大こが〔桶〕(23), 半切(23), 酒ふね(1つ), つかいたる〔遣樽〕(5ぐ), かめ〔甕〕(2つ), 小桶(8つ), やな〔簍〕(4つ), つかいたる(2ぐ), すき(1丁), みのゝ(3つ), あふらかミ〔油紙〕, ふるあおり〔古障泥〕(2くち), からふと(1つ)
2	中のみそ〔味噌〕くら	みそ桶(2つ), めかみそ(1桶), すたて〔竇立〕(2升ほど), しほ〔塩〕(3升ほど), たをし物(4つ), かま(大小2つ), なべ(大小5つ), すつほ(2つ)
3	西の蔵ニ入物	七拾五俵(麦2斗入), 六かます〔呷〕(小麦1斗3升入), もちもミ〔餅切〕(5俵), 壺斗三升ほど(つきむき〔春麦〕), めんほう〔面頬〕(2つ), かふと〔兜〕(1つ), なへかね〔鍋鉄〕(300めほど), かのつの(6つ), もろめのおもて(10状), ふるしりかい(1くち), ふのり〔布海苔〕(小俵、1つ), こが(7つ), まんくわ〔馬鋏〕(2丁)
4	ふんこ〔文庫〕の内ニ有之分	くつわ〔轡〕(7くち), しほて〔四方手〕(3つ), のくつ〔野沓〕(3つ), 古具足(1両), 手かい〔蓋〕(1くち), はいたて〔脛桶〕(1口), 甲(1はね), めんほう〔面頬〕(1つ), はさミ箱(1つ), そへかたな(3こし), そへ鍔(3本), かたな箱(1つ), もめんわた(1つ), もめんあわせ(1つ), もめんひとへもの(1つ), もめんたちつけ〔裁着〕(1つ), 木綿のかるさん〔輕衫〕(1つ), 古のかわたち付(1つ), からかわこ〔皮籠〕(1つ), きりの箱(1つ), ごめんかわ〔御免革〕(7まい), 茶かま(1つ), 折敷(九まい), まけ盆(10まい), とくり(6つ), そめ付のはち(2つ), おしき(10まい), おしき(かいしゅ〔皆朱〕10まい), さねもめん(5斤), おしき(10まい), 折敷(10まい), 古すゝの鉢(1つ), あかねのはち(1つ), おしき(10枚), 古切付(4口), つちはち(1つ), さけ食籠(1つ), おしき(9まい), おしき(10まい), 椀(四つわん、10具), きつたて〔切立〕(2つ), 椀(四つわん、10具), 白きく皿(10まい), おしき(12枚), 手しほさら(33枚), まなはし〔真魚箸〕(2せん), 茶わん(1つ), 盆(5まい), 青茶碗のはち(1つ), 丸盆(6まい), 鉄のくさり(3筋), 桐の小箱(1つ), じうのさいらう〔重の菜籠〕(10), とのゐのごき(10具), 重のさいらう(10), 盆のたをし物入箱(1つ), 古ほご入ルかわこ〔皮籠〕(1つ), いまやき茶くり(2つ), 錫(1対), 土すさら(80), 古のしほて(7口), 四つ椀(10具), 同わん(10具), 三人前へんとう〔弁当〕(1つ), 土てんもく(10), 青皿(9つ), 酢皿(20), つちとくり(2つ), 染付の鉢(2つ), やくわん〔薬缶〕(4つ), 茶釜のふた(4つ), 酢皿(大小、33), 茶碗(1つ), 土てんもく(3つ), そめつけ(8つ), 同小皿(17), 木綿布(2端), めりかけ御手箱(1つ), あさ(300目), ごま(1升), えんしやう(500め), 古しほて(3口),

	<p> そへ脇さし(2 っ), 長みの鍬(1 っ), やくわん(1 っ), とのみの  ごき(10 具), おしき(10 まい), 今やきつほ(1 っ), 四寸皿(3  っ), いとめ〔糸目〕(3 っ), そめ付皿(10), おしき(5 まい), 四  つわん(5 具), おしき(1 枚), 皮かはこ(1 っ), あかねもめん(2  っ), 麻はかま(1 具), 白あやのきる物(1 っ), かうしま〔格縞〕  のきる物(1 っ), 古の紬のきる物(1 っ), 古のつむきのきる物(1  っ), 古の木綿かたひら(1 っ), 紬のひとへ物(1 っ), 古の枕(2  っ), 匂ひ袋(1 っ), 皮かわご(1 っ), 古のとうきぬ(1 まき), 同  きれ(1 っ), もちのかたきぬ〔紬の肩衣〕(1 っ), 紅(200 め),  文箱(1 っ), かわきぬ(1 っ), かうしまのひとへ物(1 っ), 古の  かたきぬ(1 っ), ふるのもんちや〔紋紗〕ときめ(1 っ), さいミ  〔細布〕(1 端), もめん布(1 端), 皮かわこ(1 っ), 古の具足(1  っ), 手かい〔蓋〕(1 口), はいたて〔脛楯〕(1 口), 小はた筒(1  分), 古鍋(1 対), 四寸皿(20), 四寸皿(12), ぬり手桶(2 っ), 四ツ  椀(10 具), ぬり鉢(2 っ), まけ食籠(1 っ), ぢやうき(5 ツわ  ん, 10 具), 白つほさら(10), 食籠(1 っ), へんとうわん〔弁当椀〕  (12), そへ鍬(大小, 3 本), おしき(20 まい), 鍋のきつたて(2  っ), まんくわのこ(7 っ), 丸盆(10 まい), 同盆(10 まい), 折敷  (10 まい), おしき(10 まい), ぬりひさけ〔塗提子〕(2 っ), 小食  籠(1 っ), しうはこ〔重箱〕(1 っ), 湯つき(2 っ), 鉄炮の薬筒(1  っ), かうろの家(2 っ), ほかい〔行器〕(1 っ), てんもく(1 っ),  白皿(10), ぬりひさけ(2 っ), かななべ(1 っ), しうはこ(1 っ),  茶わん(2 っ), てんもく(3 っ), ゆとう〔湯桶〕(2 っ), ほかい(1  っ), ぢやうぎの家(1 っ), ゆとう(1 っ), なつめ〔棗〕(1 っ),  こうらいござ〔高麗御座〕(1 まい), 鍋のきつたて(2 っ), あを  しやくし〔杓子〕(3 本), じうはこ(1 っ), そめ付(9 まい), ぢや  うきの家(1 っ), かうがい〔筭〕(しゃくどう〔赤銅〕, 3 本),  染付皿(24 まい), とのみのごき(9 具), すゝのさけつき(1 っ),  そめつけ(13), 今やきつほ(1 っ), つゝらほん(10 まい), 小食籠  (1 っ), ぢやうし〔銚子〕(1 っ), いとめ皿(10), 染付(20), いと  め(15), ひさけ(1 っ), しうはこ(小, 1 っ), きつたて(1 っ), 茶  へんとう(1 っ), 今やきつほ(1 っ), 硯箱(1 っ), しうのさいら  う(10), かう盆(1 っ), 茶うす(1 っ), めしつき(2 っ), 水こほし  (1 っ), ゆとう(1 っ), とくり(1 っ), 小折敷(10 まい), 重かうは  こ(6 っ), 木すさら(20), 土のやき物(2 っ), 鋤(1 丁), 鍬(1 ぐ),  すり鉢(1 っ), とくり(1 っ), 茶かま(1 っ), しんちうの鉢(1  っ), つちすさら(10), てんもく(11), ふたおり(1 っ), 鉄炮(4  挺), まさかり〔鉞〕(1 丁), 鞍かさ(8 口), 鎧(5 口), </p>
--	--

注) 1:「八田家文書」『山梨県史 資料編 4 中世 1 県内文書』により作成。2: 道具名は史料の通り

表 2 元和 2 年（1616）駿府城道具等収蔵施設一覧

	収蔵施設名	収蔵品名
1	一之蔵之分	鏡・碁盤・将棋盤
2	一之蔵之前分	調度・白粉・紅・文房具・日常身辺道具
3	一之蔵にて割の御薬種	薬種・墨・象牙・しやぼん
4	御天主にしのかなか蔵	反物
5	御殿守南のかなか蔵	絲
6	御天守穴蔵	反物
7	穴蔵二階あかき箱	反物
8	おもて御納戸	綿・鉄炮道具・紙・敷物・銅地金
9	御さうし蔵	歌書・物語本・謡本・手本・史書等
10	御本丸さうし蔵の下	陶磁器・食籠・徳利等振舞道具
11	御座の間御なんとの御ふく	小袖・袷・長持・皮つづら
12	内藤主馬預り蔵之分	皮革・敷物・馬具・碁将棋道具・小間物・能装束・能面
13	穴蔵内藤主馬あつまり分	裂地・皮革・鷹道具・小柄・小刀・足袋・履物・薬種道具・香道具・茶道具
14	穴蔵上之白箱	反物・香木
15	穴蔵取次之櫛下御道具	薬種道具
16	二ノ丸紙綿紅入御蔵	綿・紅・蠟燭・紙・呉須
17	未申二階之御蔵	綿・糸・反物・敷物・香木
18	御てんしゆ取つきのした蔵	反物・蚊帳・七宝鉢
19	御本丸ひつしさる三かいの前 けつしよ物	小袖・夜具・袷・単・羽織・反物
20	一のくら次 けつしよ蔵	反物・燭台等
21	御本丸南之長蔵おさい預り分 ひつしさる三かいの下蔵分	鉢・鍋・反物
22	御本丸南之長蔵おさい預り分 ひつしさる三かいの下蔵之分	敷物・日常身辺道具・調度
23	御天守之かみ蔵分 御本丸かみ蔵三つ分 御さうし蔵之かみ分 御本丸かみくら三つの分	紙類・鼓皮・簾

注）1:「水戸家本 駿府御分物帳」（徳川 1992）により作成。2:道具名は史料の通りではなく、徳川 1992 の分類による名称である。

表3 天和元年（1681）越後高田城道具等収蔵施設一覧

	蔵名	収蔵品名
1	本丸広間在之内土蔵一番長持入	瀬戸水指(1), 古備前水指(1), 青磁口よせ小香炉(1), 同硯屏(大小, 2), 荷葉硯(1 面), 天目台(3), 建盞天目(2), 卓花入(唐金, 1), かね乃卓花入(1), かね乃かけ花入(1), 青磁いかけ筆荷(1), 唐金雨龍筆荷(1), 文鎮(2), 軸留(1), 焼かち入(やき物, 1), 唐墨(1 挺), 青磁蓮之茶台(1), 同釣舟(1), 鳩之香炉(1), くりく食籠(1 組), 青磁下皿(1), 朱盆(1 枚)
2	本丸広間在之内土蔵二番長持	源氏筥(梨地蒔絵, 1), 食籠(大小, 2), 大耳水指(唐金, 1), 青磁布袋香炉(1), 唐錫水次(1), 高麗茶碗(4), 人形硯(1 面), 堆朱角食籠(1 組), 紅花盆(1 枚), 錦手六角鉢(1), 同食籠(1 組), 和漢朗詠集, 鴈之硯(1 面), かねの麒麟香炉(1), 東山殿写之硯箱(1), 尊円手本(1 巻), うす板(1 枚), 南蛮水指(1), たひひさんくりはち(1), ふち赤之盆(1 枚), 白川殿筆 三拾六人歌合, 長恨歌(1 巻), 二条為氏筆巻物, 唐物挽溜(1)
3	本丸広間在之内土蔵三番長持	古田(3 幅対), 毛松虎之絵(1 幅), 蒔絵硯筥(1), 新百人首, 近江八景
4	本丸広間在之内土蔵四番長持	櫛箱, 鷹之書物并麝香(梨地箱二入, 1 箱), 堆朱大盆(1 枚), 竹之子(青磁, 花入 1), 御内書入ル筥(1)
5	本丸矢倉之内二有之道具之覚	青貝筆(1 本), 堆朱六角重印籠(1 組), 硯(1 面), きんかい(茶碗), 青磁ふた獅子香炉(1), 随心院御門跡歌仙(1 巻), 仙洞小色紙, 高麗わりこうたい(茶碗, 1), 新院勅筆, 秀丸様御懷帋, 唐金牛之筆荷(1 箱入), 唐金水次(1), 高麗薄茶之碗(3 ツ), 同水さし(1), 青磁硯屏(1), 印判文鎮(1), 朱四角盆(1 枚), 高麗ひかわり茶碗(1)
6	本丸雑蔵一番改	帳紙(7 束 8 帖), 箱挑灯(7), 木海月(9 袋, 4 斗 5 升), 苧 中振(15 把), かき紙(12 枚), 薄縁(15 枚), こさ(15 枚), はき(1 本), 明長持(1 棹), 明箱(大小, 10), 炭入(1)
7	同所二番改雑蔵	紺木綿(134), たう紙(2 緞), 薄はり(1 包), 棒(39 本), 熊手(10 本), 手鋤(4 丁), 染革(2 枚), さらし苧(2 把), ことく(1), 明箱大小(13), 木綿紺之単羽織(17), 革下緒(100), 古紙桐油(1), 長持之棒(2 本), 挟箱之棒(3 本), 古棕櫚箒(2 本), いため皮(21 枚)
8	同所三番改雑蔵	番刀(152 腰), 脇差(50), 馬皮(8 枚), 熊皮(23 枚), 羚羊皮(4 枚), 古黒椀朱椀集物(1 長持入), 湯次(13), 古湯次(10), 間鍋(3), 古留塗湯桶(10), 古食次(21), 古貝桶(1), 古膳(49 膳), こはれ丸盆(17 枚), 板折敷(10 枚), 胡椒壺(10 箱), 菓罐(1), 塩辛壺(2), われ鍋(2), とく利(4), 鉢(7), 古食櫃(1), 古指躬皿(44), 集鱈皿(47), 集さしミ皿(34), 集ちよく(241), 染付茶碗(73), 鱈皿集物(80), 取集鱈皿(108), 集茶碗(57), こはれ挑灯(6), 明箱(22), 黒椀(80 人前), 黒本膳(80 人前), 黒二ノ膳(140 人前), 古朱椀膳共(100 人前), 黒吸物椀(40 人前), 黒二ノ椀(39 人前), 集黒椀色々(1 箱入), 朱盃(100), 長持棒(3 本), 炭(2 箱入)

9	同所四番改炭蔵	炭(20 俵), 引あみ(1 箱), 明箱(2), 長持棒(1 本)
10	同所五番改炭蔵	炭(3 俵)
11	同所六番改仕込蔵	味噌桶(13), 桐長持身計(1)
12	同所七番改ぬかミそ蔵	古桶(63), 古瓶(9), 釜(1 口), 臼(1 から), 置いろり(1), そは切板(1 枚)
13	同所八番改つきや	から臼(4 から), 薪(少), 半切(2), 指せいろ(1), 石うす(1 から), 温鈍板(1 枚), 明長持(1), 明箱(4 ツ), 釣瓶(2), 雑道具(1)
14	同前拾老番改不明多門	台(2), 桶(5), 屏風箱(1), こはれ箱(1), くすれ膳棚(1), やふれ渋紙(1 ゆい),
15	同所十二番改円斎預り蔵	古白地式枚絵屏風(2 双), 古式枚金絵屏風(1 双), 古絵六枚屏風(3 双), 古屏風(片々), 右黒塗蒔絵重箱(3 組), 右黒塗蒔絵提重(1 ツ), 古丸盆(20 枚), 古たはこ盆(2 枚), 赤かね口鍋(1), 古ため塗ふち高(24), 古花毛氈(6), 古手拭懸(2), 赤かね古火かき(3), ため塗古ちり取(3), ちよく(13), ほうろく(1), そめ付小鉢(1), 塗はんぞう(3), 赤かね手水手洗(1), かね火鉢(15), こたつ檜(4), 木地たんす(2), 古台子(3 組), 古風炉(3), 茶うす(1 から), 花瓶(1), すひつ(2), 懸とうかい(20), 古花桶(3), 古きう台(1), うす板(1 枚), しよく台(30 本), 袋行灯(9), かな行灯(3), 手燭(2), 合羽入わく(3), 古かさね箱(4), わたしかね(大小, 3), 古炭斗(9), 三方足打(4 かゝけ), 取集雑桶(22), 火鉢家(1), こはれ打板(4 枚), 戸棚(1), 明長持(1), 帳箱(1), こはれ挑灯(2), 壺(1), 明箱(100)
16	二丸武具倉一番改	床机(1), 朱(老貫式百拾九匁三分), 細曳(20 筋)
17	二丸武具蔵二番改	渋紙(30 枚), 細曳(20 筋)
18	二丸武具蔵三番改	青貝刀懸(1)
19	二丸武具蔵五番改	細引(280 筋)
20	本丸多門之内小屋道具	渋紙(400 枚), 細引(350 筋), 細縄(500 尋)
21	三丸南之多門	刀筒(2), 床机(2), 早懸挾箱(2), 覚書(20 冊), 細曳(104 筋), 渋帋(419 枚), 色紙(1 箱)
22	三丸六番改雑納戸	布(15 端), 厚紙(9 束), 吉野葛(7 斗 8 升 5 合), 木海月(1 斗 5 升), 茶臼(1 柄)
23	三丸七番改雑納戸	白苧(7 貫目), 鍋(大小, 22), 大間鍋(17), 砂皿(450), 砂鉢(9), 晒苧(5 貫 700 目)
24	三丸八番改雑納戸	かたくり粉(5 斗 9 升), 蕨之粉(2 斗 9 升 2 合), 黒塗手之洗(2), ため塗手水手洗(1), 錫切立(10), 錫徳利(5 器), 木綿(1 端 1 丈), 煎焼鍋(2), 古折敷(20 枚), 黒椀(20 具), 黒塗重箱(4 組), ため塗重箱(1 組), かなへ(5), 小国小板紙(1 束)
25	三丸九番改鉄釘鋳倉	布縁(33 端), 白布縁(25 端)

26	三丸十三番改作事鏡蔵	白檀木(1本)
27	三丸追手多門渡り櫓之下東	備後表(293枚)
28	大手門櫓之上東之方	古燭台(2), 古薄縁(100枚), 古塗膳(35人前), 古塗丸盆(14枚), 古木具(20膳), 古手拭懸(2), 古朱椀取集(15人前), 茶臼(1柄), 唐金之風呂(1), 鉄風呂(1), 水指(1), 水翻(1), 風呂釜(1), 古硯箱(1), 盃(9), 取集小砂鉢(3), 古組入盆(5), 風呂釜(1), 煎茶之碗(3), 六尺取集屏風(1双), 小屏風(1双), 古かな引焼(2), 古かね菰蕩盆(2), 古火搔(1), 古釜(3), 古二枚屏風取集(1双), 古秤(3箱), 古衣架(1), 古平釜(3)

注) 1: 原 2005 により作成。2: 道具名は史料の通り

文書・記録からみた五十子（いかつこ）陣

森田真一(群馬県埋蔵文化財調査事業団)

「太田道灌状」(『北区史 資料編古代中世2』中世記録 48号)

道灌如申者、五十子御陣事者及三十年、被立 天子御旗候之处、

道灌者其儘成田張陣、榛沢へ御着奉待請候、雖然可被立 御旗地無之候由御内談候之处、道灌如申者、鉢形要害可然存候

『梅花無尽蔵』(『五山文学新集』六巻、926頁)

康正乙亥騒屑以来二十有余霜、高揚帝旗、陣武之五十子、禍自戯下起、公之父耶道真、倡将師屯兵於上陽赤城之麓河北矣、

【解説】五十子陣は、享徳3年(1454)12月に東国で勃発した享徳の乱において、古河公方方に対抗するために上杉氏方(京方)が構築した陣所である。近年、五十子周辺の発掘調査が進んだことにより、西五十子台遺跡、東五十子城跡遺跡、西五十子大塚遺跡(『本庄市史 資料編』本庄市、1976年。東五十子城跡遺跡については、『東五十子城跡遺跡』本庄市遺跡調査会、2004年も刊行されている)、六反田遺跡(『六反田』岡部町六反田遺跡調査会、1981年)、東五十子・川原町遺跡(『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会、2002年)、東五十子赤坂遺跡(『東五十子赤坂遺跡』本庄市遺跡調査会、2004年)、東本庄遺跡(『東本庄』本庄市教育委員会、2004年)などが五十子陣に関する遺跡であることが明らかになってきた。その分布は、おおよそ東西2km弱、南北1km強の広範囲にわたっている。したがって、従来の多くの研究のように陣の中心部のみを考えるのでは、不十分になりつつあるといえよう。その点、文献史料に基づいて陣の広域性を考察した研究も現れている(松岡進「戦国初期東国における陣と城館」『戦国史研究』50号、2005年、峰岸純夫「享徳の乱における城郭と陣所」千葉城郭研究会編『城郭と中世の東国』高志書院、2005年)。また、出土遺物に関しても、かわらけを上杉氏の支配地域と結びつけて分類する試みも行われている(田中信「山内上杉氏の土器(かわらけ)」とは」埼玉県立歴史資料館編『戦国の城』高志書院、2005年、太田博之「五十子陣」研究ノート」『群馬考古学手帳』15号、2005年)。ただ、これまでの発掘調査報告書では、多くの出土遺物の所属